

國學院大學學術情報リポジトリ

大村益次郎銅像と賀茂水穂

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂井, 久能 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001032

大村益次郎銅像と賀茂水穂

坂井久能

はじめに

二〇一八年は明治改元一五〇年にあたる。改元の前年十二月に発足した新政府が、戊辰・己巳の内戦を経て天皇制中央集権国家・近代立憲国家を建設していく大きな節目の年である。この変革をつくりだした立役者の一人長州藩の大村益次郎は、四境戦争（第二次長州征討）で軍事に頭角をあらわし、新政府に仕えて上野戦争では江戸に下り、軍務官判事・江戸府判事としてこれを鎮圧、初代兵部大輔となって明治軍制の基礎を築いた人物である。彼を通して日本近代史を再検証することは、以後の内乱や対外戦争、近代の軍制等を考える上で意義深いことであるが、本稿は大村益次郎そのものを検証するのではなく、彼を顕彰し銅像を建設した経緯と、その歴史的背景を探ることを目的としている。

大村益次郎銅像は、靖國神社の大鳥居（第一鳥居）を入った参道正面にある。「日本で最初の洋風技法による屋外に設置された記念碑的銅像^{〔1〕}」と評価され、多くの銅像関係書籍や観光案内書に紹介されている。論考も数多くあり、

今さら論ずる余地はないかの如きである。しかしそれらの論考は美術史に偏しており、歴史学から取り組んだ論考は管見の限りほとんど見当たらない。また、美術関係の研究史でも明らかにされていない部分が多く存在することから、本稿では次の二点を中心にささやかな卑見を述べようとするものである。

第一は、大村像の基壇と銅像にはそれぞれに銘文があり、いつ誰が制作したのかを刻んでいるが、その間にある鑄鉄製の円柱部は、三條実美の撰文并書を鮮やかに鑄出しているものの、いつ誰がどのようにして制作したのか全くわかっていない。美術史でもあまり触れていない状況であることから、以下に円柱部の解明を試み、大村像全体の建設の経緯を明らかにすることである。第二は、明治十五年に大村像の建設が發起され、明治二十六年に完成するまでの展開をたどる中で、大村像建設の歴史的背景や銅像建設の意義を探ることである。

一、大村益次郎銅像における円柱部と賀茂水穂

1 大村益次郎銅像における円柱部

大村益次郎銅像は、花崗岩を積み上げた基壇と鑄鉄製の円柱部と青銅製の銅像からなっている（写真1）。各部の法量（単位はセンチメートル）は次の通りで、総高は十二メートル余りに達する。^①

基壇 高さ四一六・五（現状三九八）、四段のうち

最下段の幅一〇七〇

円柱部 高さ四七〇

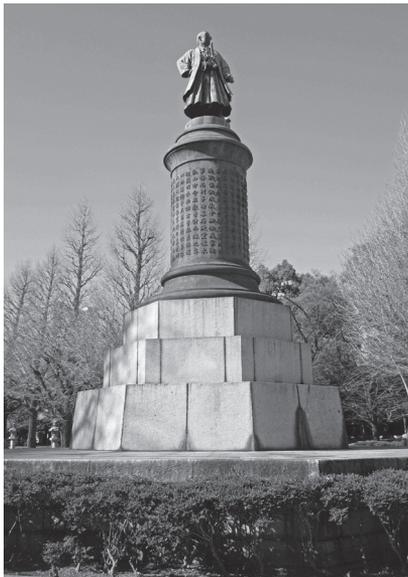


写真1 大村益次郎銅像

銅像 高さ三二〇（うち台部である「地山」の高さ二三）

基壇は、花崗岩の切石を平面八角形、階段状四段に積み上げている。長州藩の村田清風の孫村田峰次郎が、大村像の完成間もない明治二十五年十二月に刊行した『大村益次郎先生傳』は、大村像建設の経緯を記す最古のまとまった史料であり、それには「花崗石臺」について次のように記している（句読点を適宜補った。以下同じ）。

石臺は東京本郷駒込肴町の石工酒井八右衛門（東京屈指の巨匠）之か工事を請負ひ、讃州まさき島の花崗岩を以て之を築く。地盤は土中壹丈を掘込み、皆な「コンクリート」を以て之を固め、極めて基礎を堅牢のもの（の、筆者挿入）となせり。但し石臺築造ハ二十年八月より起工二十一年七月竣成す。

石工の酒井八右衛門が請け負ひ、明治二十年八月に起工し、翌二十一年七月に竣成したという。現存基壇にも「本郷區駒込肴町／石工 酒井八右衛門／世話役 浅野辰五郎」／は改行、以下同じ」と陰刻されており、上記を裏付けている。

銅像は青銅製で、地山に銘が陰刻されている。紹介した事例が少ないので、全文を載せる（写真²）。

兵部大輔贈従三位／大村永敏君銅像／造立委員／正三位勲一等伯爵山田顯義／従三位勲三等原田一道／従四位勲三等長谷川貞雄／従四位勲四等寺島秋介／正五位勲三等井上教通／従五位勲六等片岡利和／正七位勲六等賀茂水穂／〔アキ〕



写真 2 大村像地山銘文

（黒川弘毅氏撮影、屋外彫刻調査保存研究会提供）

明治十五年十一月／賀茂水穂紀念／銅像建設ヲ主唱／シ諸務ヲ擔任ス／大熊氏廣彫刻築／造ヲ計畫シ之ヲ小石／川砲兵工廠ニ於テ鑄／造シ明治二十五年／十月竣功靖國神／社境内ニ建立ス／宮内省賜金有志／者寄附金計金／壹萬圓余之ヲ費／用ニ充／〔アキ〕彫刻師大熊氏廣／鑄造技手金子増燿／鑄工岩田磯次郎／全 井上豊吉／全 村田丑藏／全 塚田萬平／全 鯉沼磯次郎／全 北村正二郎／全 谷口金藏

これによると、明治十五年十一月に賀茂水穂が「紀年銅像」建設を主唱して諸務を担当し、「銅像造立委員」に山田顕義ら七名がいたこと、大熊氏廣が彫刻と鑄造を担当し、小石川砲兵工廠の鑄造技手金子増燿や鑄工七名で明治二十五年十月に銅像が完成したこと、宮内省からの賜金や寄附金の合計一万円余りを費用に充てたことなどがわかる。銅像建設に関する貴重な記録である。そして、基壇にも次の文字が陰刻されている。

主唱 建築擔任 賀茂水穂

塑像 彫刻師 大熊氏廣

鑄造 東京砲兵工廠

この銘は、地山の銘との齟齬はないので、両者ともおそらく主唱・諸務・建築担任を務めた賀茂水穂の撰文と思われる。

円柱部は、上記『大村益次郎先生傳』に「鑄鐵臺長圓形 高拾四尺」「鑄鐵臺には、内大臣三條公の撰文揮毫に係る銅像の銘を鑄出せり。文章嚴肅筆法雄健また以て精美を添ゆ。是實に同公の絶筆なり」と記されている。「嗚呼此故兵部大輔贈從三位大村君之像也」で始まり「明治廿一年六月 内大臣從一位大勲位公爵三條實美撰并書」で終わる銘文は、文中に「故舊相謀造立銅像、以表其偉勲」とあるように、大村益次郎を顕彰するものである。大村銅像は大村の顕彰のために建設されたもので、その顕彰を銘文で示したのが円柱部である。上記『大村益次郎先生傳』は「鑄鐵

臺」として銅像の台座のように捉えているが、明治十六年三月十日付の『東京日日新聞』は「今其結構を聞に、三重臺石の上に標石を建、壇上に八君が結髪双刀を佩れし立像を安置爲す由なり」とあり、「台石」と「標石」と「立像」に区別し、円柱部に相当する部分を「標石」と記している。また、後述のほぼ同時期と思われる大村像建設の寄付を募った第一回「廣告」⁽⁵⁾には、「モニユメント」ノ言タル記念標ノ謂ナリ」とあり、大村像を「記念標」と記している。「標」は「しるし」の意味であり、顕彰を文字で表したのは円柱部であることから、本来は円柱部が中心となるべきであろう。銅像が注目されると、明治二十五年十二月刊行の『大村益次郎先生傳』に「鑄鐵臺」と記されるように、円柱部は銅像の台座としてみられるようになる⁽⁶⁾。但し、後掲の大熊氏廣が明治二十三年四月〜六月頃に作成したと思われる「故大村兵部大輔銅像費概算」に「一金 千〇五拾円 鑄鉄臺」とあるので、円柱部を鑄鉄台として台座のように捉える意識は既に銅像制作者である大熊に明治二十三年の時点であったことがわかる。彫刻家大熊の捉え方がその後定着していったのかもしれない。

2 大村益次郎銅像円柱部の鑄造時期

大村像基壇は明治二十年八月に起工し、翌二十一年七月に竣成したが、円柱部はいつ誰が制作したのか不明である。明治二十三年三月出版の錦絵「東京名所ノ内 九段坂上靖國神社」(幾英筆、筆者所蔵、写真3)には、三段の基壇の上に乗る大村益次郎像が騎馬像として描かれている。基壇は完成していたので描いているが、その上に乗るモノは想像として描き、円柱部はまだ据えられていないことがわかる。

ところが、同二十三年七月十四日付の岡倉覚三(天心)から賀茂水穂宛の書簡(東京藝術大学所蔵、写真4)に次のような記述がある⁽⁷⁾。

拜啓、銅像圖面落掌仕、取紛れ未夕実物現場ヲ一覽不致候得共、過日彫刻師竹内久遠氏其他ノ校員ヲ派シ取調候處、長キ鑄柱ハ到底保存ノ為メ不都合ニ可有之、三條公ノ書ハ既ニ見事ニ鑄造相成候ニ付、之ノミヲ存して製作致度趣ニ御座候。(下略)

これによると、東京美術学校の岡倉覚三は賀茂水穂から銅像の図面を受け取り、実物現場である靖国神社に彫刻師竹内久遠(久一)や校員を派遣して取り調べをさせたところ、円柱部の三條実美の書は見事に鑄造されていたという。

これにより、円柱部は明治二十三年七月には基壇上部に据えられていたことがわかる。さらには、書簡から賀茂水穂が銅像図面とともに岡倉覚三に実

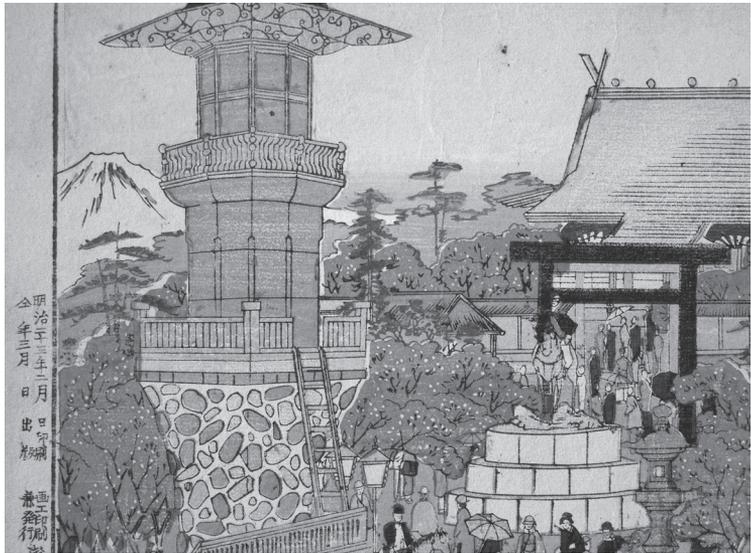


写真3 「東京名所ノ内 九段坂上靖国神社」部分(幾英筆)

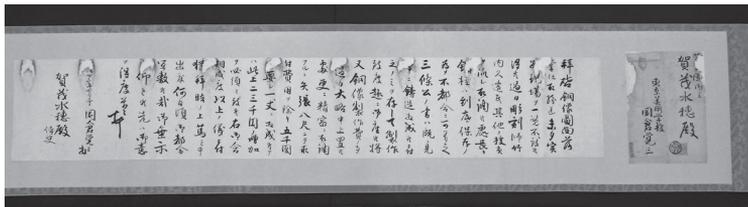


写真4 賀茂水穂宛岡倉覚三書簡(東京藝術大学所蔵)

物現場を見てほしい旨の書簡を送ったと思われ、岡倉は取り紛れていたが過日竹内久遠等を派したと述べていることから、賀茂は円柱部が据えられたので現場を見てほしいと岡倉に依頼したものと思われる。取り紛れた期間があるので、また既述の錦絵は明治二十三年三月の出版で円柱部が描かれていないことから、円柱部の据え付けは同年四月から六月頃と推測される。

一方、銅像については『大村益次郎先生傳』に「同十八年の春、銅像製作のことを大熊氏廣氏に託し、之が建設の計畫をなさしむ」とあり、氏廣の孫大熊氏治氏の「大熊氏廣年譜稿」(以下「年譜稿」)に「明治18年4月 大村益次郎公銅像の設計委嘱」とあるので、明治十八年四月に大熊氏廣が銅像制作の設計を委嘱されたことがわかる。彼は当時満二十八歳という気鋭の彫刻家であった。工部美術学校彫刻学科でラギーザらに彫刻を学び、「年譜稿」によると明治十五年六月に首席で卒業し、有栖川宮邸の彫刻部を担当していたが、同十七年七月から工部省工作局管轄課に出仕、工部省廃止に伴って同十九年一月に内務省土木局に出仕した。この後の渡欧は、『大村益次郎先生傳』に「同二十年大熊氏彫像研究のため歐洲に赴く」とあるが、「年譜稿」によると明治二十一年三月十日に横浜港を出港し、パリを経てローマ美術学校に入学、翌二十二年九月に同校の修業証書を受領し、同年十二月帰国したとある。次の史料からも、渡欧時期は「年譜稿」の記載が正しいであろう。渡欧について、大熊は内務省に次のような休職願を提出している。¹⁰⁾

八等技手休職 大熊氏廣

私儀、豫而故大村兵部大輔銅像ノ彫刻及鑄造等ニ着手罷在候得共、本邦從來銅器並佛像等ノ鑄造ニハ固有ノ美術ヲ存スルト雖トモ、肖像ノ如キニ至リテハ原形ヲ精細彫刻成スト云ヘトモ、鑄造事業之不完全ナル故、充分原形ノ儘鑄造スルコトヲ得ス。本邦未タ曾テ経験無之事故、之レヲ欧州ノ鑄造法ニ倣ヒ種々試験致スト雖モ、地金

ノ調度及鑄型等ノ原質ヲ詳ニ知ル能ハス。幸ヒ御用閑之事ニモ有之候ニ付、凡ニケ年間程佛國江留学之上、右鑄造法方等研究致度奉存候間、在職之儘何卒洋行御許容被成下度、此段奉願候以上

明治廿一年二月

大熊氏廣印

内務大臣伯爵山縣有朋殿

これによると、日本には銅器や仏像の鑄造はあつても、肖像について精緻な彫刻をそのまま鑄造する技術が不完全なので、欧州の鑄造法を研究するため、二年間在職のままフランスに留学したいという願ひである。大村銅像の委嘱が契機とも記している。この願ひは同二十一年二月二十二日に閣議で聴許され、三月十日に日本を發つた。

帰国後の大熊は、明治二十三年三月に山田顕義の紹介で大村益次郎の妻に会い、肖像の原形制作の準備を進めるとともに、「年譜稿」によると、同年八月に「大村益次郎公銅像彫刻及び監督を委嘱（山田顕義伯その他）される」とある。既述のように明治十八年に大熊に委嘱されたのは「大村益次郎公銅像の設計」なので、ここで銅像の制作をあらたに委嘱されたと解せられる。このことに関連して、先に掲げた岡倉覚三から賀茂水穂宛の書簡に「製作致趣ニ御座候」とあり、以下銅像鑄造費用のことが述べられていることが注目される。賀茂は岡倉及び東京美術学校に大村銅像の制作を依頼したように読み取れ、岡倉は「製作」を了承しているのである。書簡とともに卷子装されている銅像制作費用に関わる次の史料がある。岡倉書簡以外は未公開のため、以下に掲載する（①は岡倉書簡の後段を抄出）。

①（岡倉覚三書簡） 賀茂水穂宛 明治二十三年七月十四日付

銅像製作費ノ事、過日大略申上置候處、更ニ精密ニ取調フルニ矢張八尺ニテ取付費用ヲ除キ五千圓[㊦]要シ一丈ニ相成候テハ此上二三千円ノ増加ヲ必須と致候。（後略）

②（見積書） 大熊氏廣（押印） 明治二十三年四月二十三日付

記

一金千八百円也 尅丈四尺余石膏製立像尅軀 彫刻料并下職工費共
右之通ニ御座候也

明治廿三年四月廿三日 大熊氏廣^⑩

③(見積書) 作成者記名なし 明治二十三年六月九日付

記

一金尅千八百円也 銅像丈ヶ六尺 仕上リ之料

内訳 一金五百圓也 木形一式材料及ヒ手間料

一金千三百円也 銅薪炭并ニ惣仕上ヶ手間料

右以代金式円像之分調整候也。

明治二十三年六月九日

④(銅像費概算書) 筆者・日付なし(②と同じ罫紙)

故大村兵部大輔銅像費概算

一金 千三百円 千三百貫目 地金代

一金 千五百円 鑄造仕上工料

一金 千〇五拾円 鑄鉄臺

一金 五百円 石膏抹并延鉄類

一金 百六拾八円 鉄柵

一金 六百元 運搬居(据力) 附諸費
惣計金五千百拾八円也

⑤故大村兵部大輔銅像建築費収支決算調 賀茂水

穂(押印) 明治二十三年五月十二日付(写真5)

故大村兵部大輔銅像建築費収支決算調

収入惣額 金九千九百三拾五圓六十六錢六厘

内訳 金九千〇六拾五円七拾六錢六厘

寄付金

金八百六拾九円九拾錢 利子

支拂 金四千八百貳拾七圓五拾八錢四厘

内訳 金三千三百九拾七圓九拾壹錢五厘(厘)

金五百八拾六円五拾三錢九厘

金七百圓

金百四拾三圓拾三錢

差引残金五千百〇八圓〇八錢貳厘

右之通りニ有之候也

明治二十三年五月十二日

賀茂水穂印

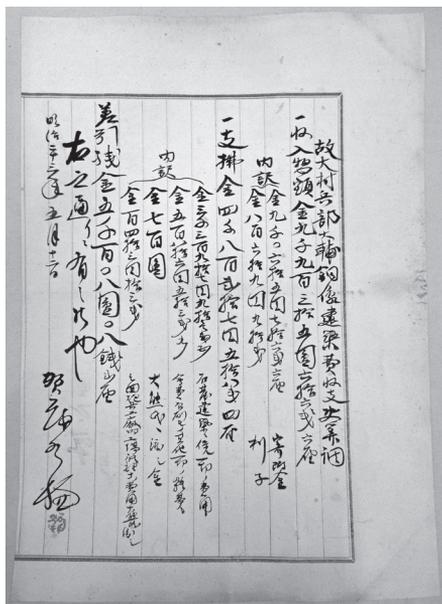


写真5 大村像建築費収支決算調 (東京藝術大学所蔵)

これらのうち、②④は同じ料紙で筆跡も近似しているので、④も大熊氏廣の作成と思われる。③の料紙は②④と似

石臺建築ニ係ル一切ノ費用
會費印刷モノ其他一切ノ雜費
大熊氏へ渡シ金
今回砲兵工廠内工場修理等費用大熊氏へ渡シ

ているが別物で筆跡は近似している。②～④は関連する内容なので、大熊が作成したものと推測される。大村像石膏原形の彫刻費と銅像の製造費などに関する見積書を、大熊が明治二十三年四月から六月にかけて作成し、銅像制作の庶務会計を担った賀茂水穂が五月までの収支決算書を作成し、同年七月に岡倉覚三が賀茂水穂に製作費について書翰を送ったという一連の文書である。これらからわかることを列記してみる。第一に、銅像の大きさが制作費との関係もあってこの時点では定まっていなかったことである。六尺・八尺・一丈・一丈四尺などが示されている。第二に、大熊の見積もりに対して岡倉覚三が提示した八尺で五千円が原形彫刻費を含んでのものか定かでないが、それを含んだものとしても②③と比べた場合に高めであった。第三に、⑤から基壇としての石台の費用が約三三九八円で支払が済んでいたこと、④から円柱部である鑄鉄台が一〇五〇円、鉄柵が一六八円で、「概算」としては細かい数字であることから、完成していたものと思われる。但し鑄鉄台の費用は⑤に記載されないもので、五月の段階で代金の支払は済んでおらず、完成間もない頃かもしれない。第四に、⑤で「砲兵工廠内工場修理費用大熊氏へ渡シ」とあることについて、大熊は小石川の東京砲兵工廠内に工房を造り、明治二十三年八月から石膏の原形作成に着手して翌二十四年五月に完成し、六月から鑄造に着手して翌二十五年十月に完成している^①ので、「砲兵工廠内工場」とはその工房のことであろう。その修理費用を二十三年五月の時点で大熊に渡し済みということは、大熊に原型の制作から銅鑄まで任せていたことになる。

これらのことから、明治二十三年に賀茂水穂が岡倉覚三に図面を渡して現地を見てもらっているのは、岡倉書簡の後段で述べられているように、制作費用の打診が主な狙いだったのではなからうか。岡倉や開校一年の東京美術学校に銅像制作まで依頼したとは考えられない。岡倉への打診を経て、翌八月に改めて大熊に「大村益次郎公銅像彫刻及び監督を委嘱」したものと思われる。委嘱を受けた大熊は、同月から石膏による原形の制作に取りかかることになる。

大村像円柱部は、上記のように明治二十三年四月から六月頃に基壇の上に据えられたものと思われ、同年七月には銅像の高さ及び費用が検討され、八月に大熊は改めて銅像彫刻及び監督を委嘱されたことで塑像の制作に取りかかり、翌二十四年五月に原型完成、六月から铸造を開始して翌二十五年十月に完成した。同年十二月刊行の『大村益次郎先生傳』に銅像を据えた写真が掲載されているので、完成後間もなく据えられたものと思われる。

3 大村益次郎銅像円柱部の铸造者

大村像円柱部は、明治二十三年四月から六月頃に据えられ、費用が一〇五〇円で、同年五月十二日の時点で代金未払いであったことなどがわかった。大熊氏廣がそれに関わったことは、大熊の作成と思われる「故大村兵部大輔銅像費概算」に鑄鉄台と記されていることから推測できるが、前年十二月に欧州留学から帰国して間もない頃なので、留学中に進められ、大熊は鑄造には直接に関わっていないと思われる。では誰が構想し誰が鑄造したのであろうか。

これについて、村田峰次郎『大村益次郎先生傳』に「鐵臺に銘字を鑄出したる如きは同氏の意匠に基くと云ふ」と記され、鑄鉄円柱に文字を鑄出したのは賀茂水穂の意匠に基づくものという。賀茂水穂は、既述のように大村像の主唱者であるが、浜松の金山神社(註)の神職であり、若い頃平田篤胤の養子鋳胤の門人となり、慶應四年の有栖川宮熾仁親王を東征大総督とする東征軍に遠州報国隊を組織して供奉し、その後は海軍省に奉職して靖國神社宮司になった人物である。¹³ 美術家でもない当時海軍省大書記であった賀茂水穂の意匠というこの記事について、彼が父賀茂鞆音のため郷里に建てた墓碑（浜松市西区雄踏町の金山神社境内から昭和三十六年に市営雄踏墓地へ転墓）を拝して、初めてその重要性を理解した。墓碑は表に「梓弓稜威鞆音高彦命墓」、裏に「賀茂日向守橘朝臣直博後稱鞆音……明治十七年十一月廿七日歿……今茲明治廿一年十一月建碑以表其德云 海軍大主計正七位勲六等賀茂水穂謹記」とあり、鑄鉄製

工場名称	製造品種	所在地
中村工場	諸機械鑄物	同本所區柳原町三ノ二
持主	創業	職工數
中村惣左衛門	同十七年六月	男一二

墓碑の表裏に文字を鑄出している（写真6）。三條実美の撰文并書を鑄出した大村像の鑄鉄円柱部を思わせるものがあり、円柱部据え付けの一年半程前の建碑であることから、大村像円柱部が賀茂水穂の意匠に基づくという記事の信憑性は十分にありうることと思われる。

墓碑銘文の末尾に「東京本所區柳原町三丁目 鑄造人中村惣左衛門源温猛」とあることから、墓碑の鑄造者は中村惣左衛門であったことがわかる。彼について、農商務省商工局工務課『工場通覧（明治三十七年）』（明治三十九年刊）に次のように記されている。

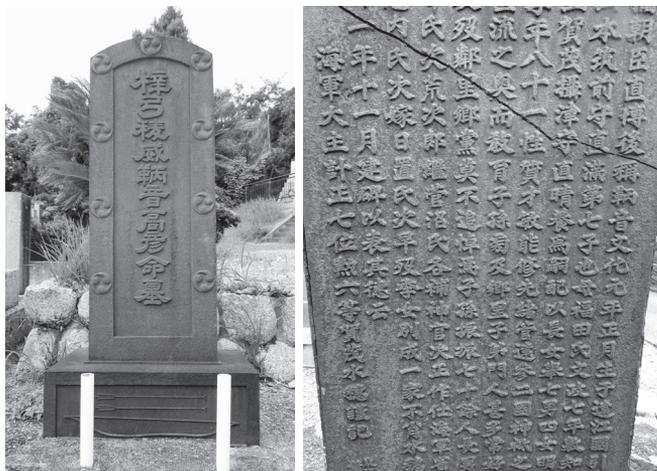


写真6 賀茂靱音墓碑の正面と背面の銘
（浜松市西区、市営雄踏墓地）

中村惣左衛門は、東京本所柳原町に工場を持つ鑄物師であった。彼の作品として、他に千葉県鴨川市の小湊誕生寺（日蓮宗）祖師堂前の天水鉢一對を実見している。左右同銘で次のような文字を鑄出している（写真7）。

維時明治廿五年五月吉祥日 小湊山誕生寺常什 六十一世 日

良代

奉 中山慶子 高倉壽子 柳原愛子

獻 千種任子 園 祥子 小池道子

發願人 東京大鋸町 西川佐野代

東京市本所區 柳原町三丁目廿一番地

鑄造人中村惣左衛門

明治天皇の生母中山慶子や大正天皇の生母柳原愛子、宮中の女官

が名を連ねるこの天水鉢を鑄造した鑄物師が中村惣左衛門であつ

た。誕生寺は、上記西川佐野代の紹介で六十一世豊永日良らが明治二十一年に後の大正天皇の病氣平癒を祈願をした

ところ、効験あらたかに平癒したとのことで、皇室の篤い信仰を得た寺である。特に有栖川宮熾仁親王は病氣平癒を

喜び、境内奥地に有栖川宮家靈廟である龍王殿を明治二十三年に建立した⁽¹⁵⁾。現存する龍王殿前に「明治廿三年一二月

吉辰 御宮殿前御水屋建立」銘の手水鉢がある。奉納者として高倉壽子・柳原愛子・小池道子・千本常子・長谷川清

子・西川佐野代の名が刻まれ、上記天水鉢の銘と四人重なる。誕生寺には皇室からの堂舎・仏像・仏具等の奉納や下

賜品が多くあり、上記天水鉢はその一つであるとともに、有栖川宮熾仁親王の尊崇が皇室の信仰の中心をなしていた。

天皇生母らの奉納品である天水鉢の鑄造に創業八年の中村惣左衛門が選ばれたのは、この三年程前に賀茂水穂が父



写真7 小湊誕生寺の天水鉢

の墓碑の鑄造を彼に依頼したことによる賀茂の推挙ではなからうか。賀茂は、上記のように報国隊を結成し、有栖川宮熾仁親王を東征大総督とする東征軍に供奉して江戸に向かい、報国隊の解散まで親王との関係が続いていた。⁽¹⁶⁾その後、賀茂は明治十五年に東海寺の賀茂真淵墓改修の事業を主唱し、賛同者や寄附金を募るなかで、彼の日記『明治十五年より 賀茂真淵大人建碑之件畧日記』（以下『畧日記』⁽¹⁷⁾）の同十五年四月条に「廿日、有栖川大将宮へ参殿、拜趨之上、賀茂大人建碑ノ義申上、賛成ヲ乞。角田（忠行）同道」とあり、新しい真淵の墓も同じ東海寺境内の有栖川宮家墓地⁽¹⁸⁾の隣接地に設けるなど、熾仁親王との交流が明治十五・十六年でも続いていた。このような賀茂水穂と中村惣左衛門との関係や賀茂と熾仁親王との関係から、熾仁親王の尊崇篤い誕生寺へ奉納の天水鉢制作の鑄物師として、おそらく賀茂水穂の推挙により中村惣左衛門が選ばれたものと思われる。

大村像の鑄鉄円柱部が誰の構想によりいつ誰が製作したのかについて、その可能性を縷々述べてきたが、結論として、『大村益次郎先生傳』に記すように、賀茂水穂の構想により、本所の鑄物師中村惣左衛門が制作したものと推測する。勿論これには設計を委嘱された大熊氏廣が構想段階から賀茂と十分に協議していたと思われる。

二、大村益次郎銅像建設の歴史的背景

1 大村益次郎の顕彰——大村益次郎顕彰の経緯をたどる——

大村像建設の背景を探ることは、その時期に大村を顕彰する必然性がどこにあったのかを探ることもである。そこで、まずはそれまでの大村の顕彰の経緯を見ておこう。

大村は、京都で兇徒に襲われた傷がもとで明治二年十一月五日に死去し、従四位兵部大輔であった彼に、政府は同年十一月十三日に従三位を贈位した。その勅語に「夙に回天の偉業を賛げ、克く勦賊の勳を策り、軍旅の事、大いに

後圖を望むところ有り。豈料らんや溘然として世を謝し、帷幄に人を喪ふ、深く悼惜す。従三位を贈り、并に金幣を賜ふ、宣す」(原漢文)とある。¹⁹⁾ 賊軍を平定して維新回天の大業をたすけた功績を称えるときともに、今後の軍制改革への期待むなしく世を去ったことを深く哀惜すると述べている。軍制改革の中心柱を失った心情が吐露された勅語である。

次いで、大村の遺骸を埋葬した山口県の鑄銭司村の墓所近くに、郷土の人たちが中心となって明治五年三月に大村神社を建立した。鎮座祭詞に「大神赤俊清真心以皇天皇命手輔弼比阿那々比、皇大朝乃御爲皇大御國乃爲大勲功手樹弓給開留高尊俊大御懿德手恭比忝奉里仰俊奉里、彌遠水爾齋俊奉良止止…」とあり、建設の趣旨は大村の国家への勲功を顕彰し後世に伝えるためといひ、松崎與三兵衛ら一八〇余名が議して宮を建立したという。

次いで、鑄銭司村の大村神社(神社は昭和二十一年に現在地へ移転)に「大村子神道之碑」が建てられた。碑銘に「茲已卯當公十回忌辰、門人故舊相謀建墓隧之碑」「明治十一年三月建」とあるので、明治十二年の十年祭を期して、前年に建碑されたことがわかる。有栖川宮熾仁親王の篆額、陸軍中將參議議定官正四位勲一等山田顯義の撰并書になるもので、寄附人名として有栖川宮の外に東伏見嘉彰親王・三條美美・毛利元徳・伊達宗城・伊藤博文ら錚錚たるメンバーが名を連ねている。総計六十八名刻まれ、賀茂水穂・長谷川貞雄も含まれている。建碑の趣旨は、大村が身の利害を顧みず今日の「兵制完全具備」の基礎を築いた功績を称えるものであったことが碑銘からうかがえる。²⁰⁾

大村銅像の建設は、上記十年祭を期して建碑した人々らが東京の紅葉館に集まって十三年目の年祭を行った際に、大村を顕彰するために発起されたものである。その後は、明治二十一年一月十七日に孫の大村寛人が「依祖父益次郎勲功特陞授子爵」となり華族に列し、大正八年十一月に従二位に追陞、大正九年四月に「元治元年乃至明治二年ニ於ケル殉難者」に「特別ヲ以テ」靖國神社に合祀された。没後五十一年目である。

2 大村益次郎銅像建設の発起 — 誰が発起し、何をどこに建設しようとしたか —

大村像建設の発起について、『大村益次郎先生傳』に次のように記されている。

明治十五年十一月十五日、東京芝山内の紅葉館に於て先生祭典ありしとき、賀茂水穂氏先生の記念銅像を建設せんことを主唱せしに、有栖川宮、小松宮、三條公を始め席上の諸賓一同之を賛成ありければ、山田顯義、原田一道、長谷川貞雄、寺島秋介、井上教通、片岡利和、賀茂水穂の諸君同しく銅像造立委員となりてこの擧を督す。是よりして賀茂氏専ら庶事を擔當し稟議奔走釀金募集のことを務む。

賀茂水穂が「記念銅像」建設を主唱し、有栖川宮熾仁親王・小松宮彰人親王（同年東伏見宮を改称）や三條実美ら出席者の賛同をえて、山田顯義ら七名の「銅像造立委員」が選ばれ、賀茂が専ら庶務を担当して奔走したという。前掲の銅像地山の銘文も「明治十五年十一月、賀茂水穂記念銅像建設ヲ主唱シ諸務ヲ擔任ス」とあり、上記と符合するところが、この発起について、賀茂百樹旧宅所蔵資料に次の二つの史料がある。⁽²⁾

- (A) 去ル十五日芝公園地紅葉館ニ於テ故兵部大輔大村公ノ記念祭ヲ執行セシニ、來會セラレシハ東伏見宮及三條公ヲ始メ、毛利・鍋嶋ノ両家、山田・佐野兩參議以下百余名ノ播紳來會ニテ最モ盛ナリシガ、席中長谷川貞雄・賀茂水穂ノ兩人、公ノ記念碑ヲ靖国神社之中ニ建設センコトヲ主唱セシニ、東伏見宮始メ諸君忽同意ヲ表シ姓名シタルニ付、不日幹事ヲ撰ミ着手セントス（写真 8）。

- (B) 故大村兵部大輔建碑之義ニ付□□へ集會云々（賀茂水穂『畧日記』明治十五年十一月廿六日条）

(A)の文書は賀茂水穂の書簡控えて、文頭の表記や東伏見宮の明治十五年十二月小松宮改称を踏まえていないことから、十一月中に作成されたと思われる。発起の様子を最も直近で伝える当事者の史料である。(B)は、記念祭の十一日後に(A)に記す「幹事」が集会をもったことを記している。この(A)・(B)の賀茂水穂史料からわかることを列挙してみる。

第一に、大村益次郎の「記念祭」に百余名が参加し（有栖川宮は(A)にないので、不参加と思われる）、席中「記念碑」建設を主唱したのは長谷川貞雄と賀茂水穂であった。長谷川は海軍省における賀茂の先輩であり、遠州報国隊の同志であり、長谷川の実家である浜松の中村家当主中村大館の長子貞雄が長谷川家に養子に出て、当時賀茂水穂の兄東海が養子に入って当主であったという親密な関係であったことから、二人で主唱したものと思われる。『大村益次郎先生傳』及び大村像地山銘文は賀茂水穂一人の主唱のように記すが、主唱者は長谷川と賀茂の二人であったことがわかる。但し賀茂が実務の中心を担ったということであろう。

第二に、銅像でなく「記念碑」と記していることは、いしづみを構想していたとも解されるが、四ヶ月後の明治十六年三月十日付『東京日日新聞』は、「故兵部大輔大村益次郎君の記念碑」について「三重臺石の上に標石を建、壇上にハ君が結髪双刀を佩れし立像を安置爲す由なり」と報じ、「立像」を含む全体を「記念碑」と記している。次節で紹介する銅像建設に向けた第一回広告では、「モニュメント」ノ言タル記念標ノ謂ナリ石彫銅鑄シテ以テ其人ヲ像ニシ壇ヲ築キテ之ヲ立テ」とあり、肖像を石彫銅鑄したモニュメントを「記念標」と述べている。但し第二回広告で「歐洲ノ記念標」と記しているので、「記念」に訂正したと

見られる。「記念」は『大漢和辞典』に「後日の思ひ出に残しておく物事」とあり、「物をとどめて後のおもひでにする」記念を「記念と書くは非」と載せ、両者を区別している。新たに大村を偲ぶために建てるものであるから「記念」

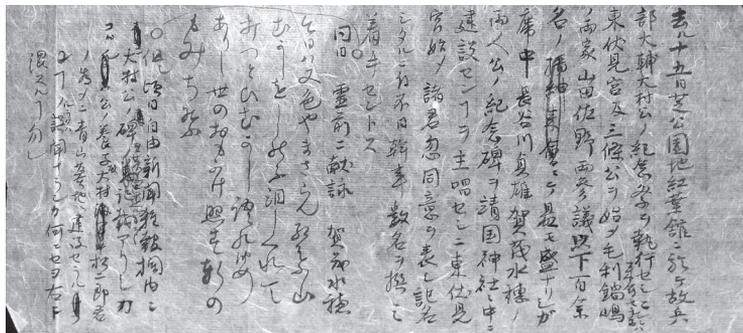


写真8 賀茂水穂書簡控

が正しい表記といえよう。また明治十五年十月十四日付で上野公園東照宮境内に井伊直弼像建設を博物館に提出した請願文も、「記念碑建設致度」と記しつつ建てるものは「銅像式銅標」と記している。このようなことから、上記(A)に記す「記念碑」は大村を偲ぶ銅像のことと思われ、当初から銅像を構想していたと見てよいであろう。

第三に、上記『東京日日新聞』の記事は、建設地を「場所ハ上野公園内若しくハ靖國神社の境内ならんと云へり」と報じ、上野公園の構想もあつたように記しているが、発起時に靖國神社に建設することが提案されていたというこゝとである。靖國神社は、その創建に大村益次郎が中心的役割を担い、官軍東征後に帰郷できなかった報國隊・赤心隊の六十二名を大村が斡旋して社司にも抱えており、元報國隊の長谷川や賀茂にとっては大村の旧恩の地であつたことが銅像の場所選定の理由と思われる。提案の賛同を承けて、大村像建設発起人総代原田一道外六名は、明治十九年四月に靖國神社境内への建設を申請し、同年六月四日付で陸軍・海軍・内務省の許可を得ている。原田一道を発起人総代としたのは、彼が当時陸軍少将正五位勲三等、元老院議員、陸軍砲兵会議議長という地位にあり、陸軍の重鎮であつたからであろう。外六名の氏名は不詳であるが、長谷川貞雄や賀茂水穂が入っていたことは推測できる。このようにして、大村像は長谷川や賀茂が当初想定していたように、靖國神社境内に建設されることになった。

以上のことから、大村の記念祭に参列したのは東伏見宮嘉彰（小松宮彰仁）親王をはじめとする百余名で、長谷川貞雄と賀茂水穂が、大村益次郎の「記念碑」としての銅像を大村や報國隊に関係の深い靖國神社に建設することを発起し、参会者の賛同を得たこと、十一日後には幹事が集まつたことなどがわかる。

3 大村益次郎銅像建設の広告―なぜ銅像を建設するのか―

195 大村像建設の広告は三度（三種類）出されており、『大村益次郎先生傳』にも載せている。第一回は年月不詳、第

二回は明治十七年五月付で、同二十一年五月付「附言」が追記された。第三回は明治二十二年五月付である。第一回目の広告は、現物が浜松市西区雄踏町の中村家文書にある。中村家は上記のように長谷川貞雄の実家であり、当時賀茂水穂の兄東海が養子に入って当主であった。その関係で所蔵されていたものである。現物には「廣告」のタイトルがあることから、新聞に広告として掲載したものであると思われる(写真9)。第二回目も「廣告」とあるので新聞に掲載したものと思われるが、第三回目は『大村益次郎先生傳』に「同志に頌ちたり」とあるので、印刷して同志に配付したのかもしれない。ともに銅像建設の趣旨を述べ寄付金を募るものである。『大村益次郎先生傳』に「賀茂氏専ら庶事を擔當し稟議奔走釀金募集のことを務む」とあるので、またこの時期賀茂水穂は後述の賀茂真淵墓改修事業の募金広告をしばしば新聞に掲載していたことから、賀茂が広告の撰文や掲載の手配などを行ったものと思われる。広告で注目すべきことを列記する。

第一に、「私ニ祭祀スル今ニ於テ十三年ヲ累又頃口相議シテ公ノ肖像ヲ銅鑄シ以テ歐洲「モニュメント」ノ例ニ倣ハント欲ス」とあり、大村の死後毎年祭祀を行ってきたこと、十三年目は明治十五年で、その時の祭典で「肖像ヲ銅鑄」した「記念標」の建設が決定したという発起の経緯を述べている。そして「記

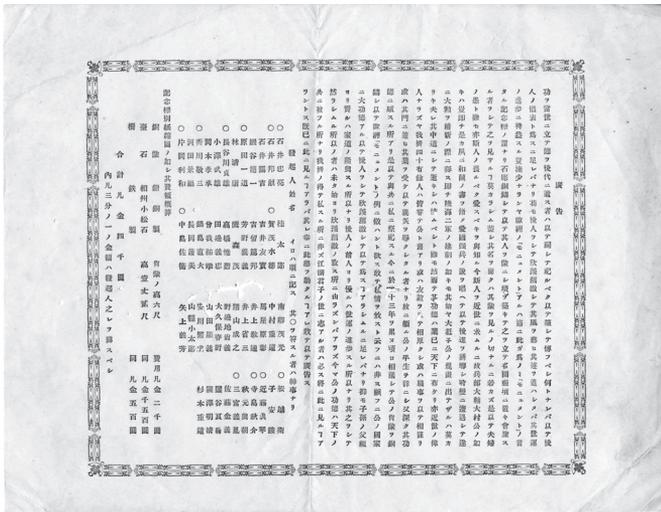


写真9 大村益次郎銅像の第一回廣告(浜松市博物館提供)

念標」については、「記念標別紙繪圖ノ如シ」「銅像 鑄銅製

肖像ノ高六尺」と記し、絵図を載せている(写真10)。六段

に積み上げた基壇の上に方柱を載せ、その上に大村益次郎が羽織・袴に総髪、刀を帯びて左手で掴み、右手は鞭を持って立つ姿であり、当初の大村像はこのように構想されていたことがわかる。先に掲げた明治十六年三月十日付『東京日日新聞』の「今其結構を聞に、三重臺石の上に標石を建、壇上にハ君が結髪双刀を佩れし立像」を髣髴させるが、結髪や三重台石などが異なっている。この「広告」の時期は不明

であるが、『東京日日新聞』の記事はこの広告を見ていないと思われることと、第二回目の広告と附言、第三回目 of 広告ともに五月付であることから、明治十六年五月ではなからうか。図を描いた人物も不明であるが、素人とは思えず、銅像の知識をもった美術家であろう。二年後の四月に大村像制作を委嘱される大熊氏廣は、明治十五年六月に工部美術学校を首席で卒業し、この頃は新築中の有栖川宮邸の彫刻部を担当していた。前章で述べた賀茂水穂と有栖川宮熾仁親王との密接な関係を考えると、図は賀茂の委嘱により大熊氏廣が描いた可能性がある。

第二に、なぜ銅像を建てるのかということである。第一回広告で「功ヲ當世ニ立テ徳ヲ後代ニ遺ス者ハ以テ祠シテ祀ルヘク以テ筆シテ傳フベシ」と冒頭に記し、「後人ヲシテ欣羨奮激シテ其風ヲ慕ヒ其跡ヲ追ハシメバ其世運ノ進歩ニ裨益スル豈淺少ナラン」ためであると述べている。欧州の「モニュメント」もまさにそのためにあるといい、「モニュメント」は「記(紀)念標」のことで、石彫銅鑄して公衆の集まる所に建て、その人物の功績や徳を後人に伝え



写真 10 第一回広告の大村公記念標
(浜松市博物館提供)

るためのものであると説明している。そして、大村益次郎については従来の「祠」や「筆」でない、西洋の「モニュメント」に倣った銅像を記念碑として建てると述べている。なお、ここでの「筆」とは、文字によって後人に伝えることであり、祠に対する碑（いしぶみ）をも含むものであろう。

この「モニュメント」について、明治九年十一月十八日付教部大輔宍戸璣が太政大臣三條実美に提出した「官社へ銅石像設立之儀ニ付伺」²⁾に次のように記され、注目される。

神社之儀ハ古來偶像祭祀ノ典禮ニハ無之候得共、(中略)別格官幣社ノ如キハ最モ近代ノ功臣ヲ祭祀ノモノニ付、其影像等現存シ功績歴然タル処、若シ或ハ未タ社殿造築無之向等ニ於テ、即今將ニ着手アラントスル制限ノ殿宇ヲ減縮シ、別ニ西洋モニユウメントノ躰ニ倣ヒ祭神ノ銅石像等ヲ設立シ、該神ノ功德ヲ永世不朽ニ記憶瞻仰セシメンコトヲ申立ツル向有之節ハ、制限ノ殿宇ニ用ユル工費之幾分ヲ分割シテ銅石像ノ入費ニ御支給ノ御詮議ニ可相成次第ニ候哉。(下略)

これは、近代の功臣を祀る別格官幣社をこれから建設する場合、建設予定の社殿などを縮小してその分「西洋モニユウメント」に倣った祭神の銅石像を設立したい旨の申請があれば許可してよいかの伺いであり、翌明治十年一月二十五日付で許可された。「西洋モニユウメント」に倣った祭神の銅石像について、祭神の功德を永世不朽に記憶し瞻仰の対象とするものとして、宗行政を担った教部省が推奨していると読み取れる伺いである。祭神の記念性を、神社の建築でなく銅石像で表現しようとする意図がうかがわれる。³⁾第一回広告で「銅石像」を「石彫銅鑄」と表現し、その建設目的なども「伺」に近似しており、賀茂水穂撰文と思われるこの広告は、「伺」を参考にしてと思われる。西洋モニユウメントの概念は、幕末・明治初期の洋行者や岩倉使節団随行人などにより、日本の神社や信仰と対比して書籍等で紹介されてきた。上記「伺」も、別格官幣社における祭神の記念性を具象化するものとして教部省で注目し

太政官も認めるところとなったことから、西洋モニュメントの導入・受容にあたっての宗教性と記念性は注目される
ところである。神社や碑よりもその人物の顕彰を広くまた後世に伝えていく記念性の高いものとして、上記何で祭神
の銅石像が注目され、大村益次郎の場合には既に神社や石碑が建設されているので、より記念性の高いものとして銅
像が採用されたものと思われる。

賀茂水穂は、大村益次郎銅像建設の主唱者であり、以後の銅像建設に最も尽力した人物であるとともに、彼は大村
像制作中の大熊氏廣に父の銅像の制作も依頼している。「年譜稿」の明治二十四年条に「賀茂軀音翁像（前日向守、
古鏡型額面半身）、同氏子息、靖國神社宮司、大村公銅像發起人の一人賀茂水穂氏依頼による（6月着手、9月完成）」
とある。そして賀茂は同二十四年十月三十日付の実兄中村東海宛葉書で「山本家へ進呈ノ亡父翁銅像額面出來候ニ付」
「右八十一月下旬亡父翁靈祭日ニ付、其節本宅ノ内へ一應額面ニ掲ケ、祭事中親戚之者へ一覽ニ供し度候」「且靈祭相
濟候上、山本家へ御渡し可被下候」と記している。⁽²⁶⁾水穂の父の靈祭に掲げるため、父の半身を鑄出した古鏡型銅像を
造り、出来上がったので送るとともに、靈祭終了後は父軀音の実家であり水穂の長兄山本金木が養子に入った山本家
へ進呈してほしいという内容である。銅像は、ここでは父の靈祭の対象として掛けられたように思われる。賀茂水穂
の銅像への思いの強さや、銅像が靈祭の対象として機能した可能性をうかがわせる事例といえよう。

ともあれ、明治九年の教部省伺の背景となった護王神社の和氣清麻呂銅像や、伺を承けての建勲神社の織田信長銅
像は、計画のみで建設に至らなかったが、大村益次郎銅像の場合西洋モニュメントに倣った初めての本格的な銅像が
靖國神社外苑の馬場中央に建設されたことは、美術史上注目すべきことである。その新たな道を拓いた賀茂水穂の人
物像にも、新たな側面が加えられるべきであろう。

4 大村益次郎銅像建設の発起人 — 銅像建設の歴史的背景 —

(1) 広告から見た発起人の特色

大村像建設の広告の後段に、『大村益次郎先生傳』には記載されていないが、現物には「発起人」の氏名が記されている。中村家所蔵の第一回目広告は四十六名、東京藝術大学所蔵の第二回目広告は六十七名で内訳は第一回目の一名が抜け、新たに二十二を加えている。第一回目には「幹事」の氏名に○印が付せられ、石井忠亮・石井邦猷・香川敬三・片岡利和・賀茂水穂・近藤眞琴・三宮義胤・寺島秋介・中島佐衡・原田一道・長谷川貞雄・船越衛の十二名である。『大村益次郎先生傳』に載せる前年十一月選出の「銅像造立委員」七名（銅像地山に刻まれた委員と同じ）から山田顕義・井上教通が抜けて、新たに七名加わったことになる。両方に名を連ねる片岡・寺島・原田・長谷川・賀茂の五名が運営の中心をなしたと思われる。第二回目の広告には幹事の記載がなく、趣旨の賛同者の報知先として長谷川貞雄・賀茂水穂の二名が記されている。主唱者であり庶務を担当していたということであろう。

二回の広告に名を記す六十八名を、経歴により分類すると次のようになる（うち一名は不明、発起当時の役職等が不明な場合が多いので経歴として分類した。数字は延べ数）。

①軍 関 係 40（陸軍 19・海軍 17・兵部 4）

②政府機関 30（内務 8・宮内 7・司法 3・大蔵 3・工部 3・外務 2・太政官 2・元老院 1・農商務 1。陸海軍省を除く）

③民 間 6（新聞・三菱・煉瓦・電燈・料亭（紅葉館）・京都豪商、各 1）

軍関係は四十名と半数を越え、山田顕義・原田一道・船越衛など、幕末から明治初期に大村益次郎とともに軍事に関わった人たちが多く含まれている。政府機関でも、例えば山田顕義は軍関係から司法に転じているように、明治初期に軍関係に勤務して他機関に転じた事例は、他に八名確認している。上記分類とは別に、大村が安政三年十一月に

江戸麹町に開いた私塾「鳩居堂」の塾生が七名（子安峻・近藤真琴・野邊地尚義・關澤明清・中島佐衡・伊藤傳吉・遠藤謹助）おり、読売新聞社初代社長の子安、「先生祭典」の場所紅葉館の支配人野邊地など異色の人物が含まれている。また、公家が五名おり、うち萬里小路通房はその娘が賀茂水穂の長男厳雄に嫁し、厳雄三女が通房の孫芳房に嫁すなど、賀茂水穂との関係が深い。洋行者は確認できただけで十八名いる。岩倉使節団の随行や留学などであり、その多さも特色といえよう。西洋のモニュメントを帰国後に紹介したのは彼等洋行者であり、西洋モニュメントに倣った大村益次郎銅像を建てることを主唱した賀茂水穂にモニュメントの概念を紹介し、建設に積極的に賛同したのも彼等洋行者であつたと思われる。

注目すべきは、戊辰戦争で駿遠の神職が報国隊・赤心隊を結成して有栖川宮を大総督とする東征軍に供奉した彼等が、ここにいることである。官軍側として活動した彼等は、国許が徳川家達の領地となつたことで戻ることができず、大村益次郎が招魂社（後の靖國神社）を建てて彼等のうち六十二名を社司とするよう斡旋した経緯がある。⁽²⁰⁾ここに名を連ねているのは、報国隊の長谷川貞雄・賀茂水穂（以上海軍）、鷹森茂・大久保春野（以上陸軍）、赤心隊の富士重元（陸軍）の五名で、皆軍関係に奉職している。そして長谷川と賀茂が大村像建設の主唱者ということから、大村像建設の背景を報国隊の視点で捉えることも重要であろう。

（2）賀茂真淵墓の改修と大村益次郎銅像の建設

賀茂水穂は、第一章で述べたように、明治十五年初頭から品川東海寺の賀茂真淵の墓改修事業に本格的に取り組んでいた。遠州国学の仲間やその中から生まれた報国隊の元隊員、東京で知己を得た国学者・神道家などに呼びかけて事業の賛同者を固め、「告條」という名の今日的なパンフレットを配付し、新聞に広告を何度も掲載して賛同者や寄

付金を集めるなど、全国に呼びかけて事業を展開した。水穂が常に相談していた同志は、長谷川貞雄と三年後に真清田神社宮司となる平田鏡胤同門の大伴千秋であった。墓地を同じ東海寺内の開山沢庵の墓に近い有栖川宮家墓地の隣地に求め、同十五年十月七日に真淵の墓を改葬した。『畧日記』には、当日の様子が次のように記されている。

本日改葬、出會人員左之通、主唱者、長谷川貞雄・賀茂水穂・大伴千秋・平尾八東・西尾貞俊・罌本孝承・中山光雄・佐藤信熙・辻村吉野・山本瑞枝・鷹森茂、正午ニ來。本居豊顚、本日祭主たり。平田胤雄、神官四人ニ付、又細井以年・井上頼国來。罌部氏喜与子來集。正午十二時、改葬之詞ヲ告、祭典執行。警察官式名立會。右祭事畢テ御墓堀ニ掛ル。諸員正食ス。午後三時、尊骸發見。新キ墓ニ治メ、式ノ如ク新墓地へ送葬ス。夫ヨリ埋葬町嚙ニ致し、八尺以下ノ地ニ治ム。午後五時ニ漸ク埋葬相濟。次ニ祭事執行。本日之祭文前後兩度祭之。權大教主本居豊顚勤之。副祭主權少教正平田胤雄外神官四人神拜。順序左之如シ。(中略) 午後六時祭事無滯相濟。

本居豊顚・平田胤雄は改葬事業の賛同者であり、祭主・副祭主を勤めた。改葬に主唱者は十一名参加し、浅羽義樹・大久保春野・足立静・松下勝信・永井信光が欠席であった。⁽³⁰⁾ 合計十六名の主唱者の報国隊関係者は長谷川・賀茂・平尾・西尾・中山・佐藤・辻村・山本(水穂の長兄山本金木の子)・鷹森・浅羽・大久保・永井の十二名である。四分の三が報国隊関係者であり、墓地改修は長谷川貞雄・賀茂水穂が元報国隊員を結集し、彼等を中核として行った事業といえる。

墓地改修は、転墓を終えても新墓地の整備等でその後も事業は継続され、墓域に現存する本居豊顚撰文の「賀茂翁墳墓改修之碑」は明治二十一年五月付である。一方、賀茂水穂らは明治十五年十一月二十八日の『畧日記』に「大伴役所(註、水穂の勤務する海軍省)へ來、四大人贈位願書持參。大伴同道、東京府へ出願。銀林書記官二面會、願書差上ル。右願書調印連署」とあるように、四大人の贈位を出願した。上請文に連署した「有志者總代」は、長谷川貞

雄・賀茂水穂・大伴千秋（賀茂真淵五代孫岡部喜代代印）・鈴木重嶺・井上頼圀・羽倉光表（羽倉東滿七代孫）・本居豊顯（本居宣長三代孫）・平田胤雄（平田篤胤四代孫）の八名で、上請文に次のように述べている。⁽³¹⁾

維新盛業ノ結果ハ天皇陛下聖徳ノ然ラシムルモノト雖モ亦勤王諸士ノ輩出ニ原因セスンバアラス、而テ此ノ諸士輩出ノ結果ヲ顕ハス所以ノモノハ則羽倉東滿・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤等の著書其原因ヲナセバナリ。

維新盛業を成したその原因として四大人が果たした功績を述べ、既に贈位された蒲生君平や佐藤信淵は四大人の弟子であることも引き合いにして贈位を出願した。結果は翌年二月二十七日に四大人ともに正四位の贈位が宣下された。⁽³²⁾ この四大人の贈位出願の十三日前、十一月十五日に、長谷川と賀茂は大村銅像建設を発起したのである。長谷川と賀茂は、墓地改修事業と四大人贈位請願への取り組みの中で大村益次郎銅像の建設を発起していることから、両者の関係を考えるべきであろう。それは、前者が報国隊の基盤をなした遠州国学が生み出した賀茂真淵の顕彰であり、後者は報国隊が官軍東征に供奉して上野戦争まで戦い招魂社（靖國神社）の創建・奉仕に密接な関わりをもった大村益次郎の顕彰である。賀茂真淵と大村益次郎の顕彰という、一見繋がりにくい両者は、報国隊の活動を通して関連を持ち、報国隊にとって両者の顕彰は隊の顕彰にも繋がる意義深い事業となりうるのである。先の上請文の表現を借りれば、維新盛業の原因を成した功績としての賀茂真淵と、維新盛業を軍事面で卓抜な功績をあげて成し遂げた大村益次郎の顕彰ということにもなるであろう。

時に明治十五年は、同十一年三月に高山正之（彦九郎）、同十四年五月に蒲生秀実（君平）、同十五年六月に林子平・佐藤信淵が贈位されるなど、維新盛業をもたらした人たちへの顕彰がにわかに意識された時期であるとともに、欧化主義や自由民権運動の高揚の中で政府要路の人たちなどに時勢を憂慮する意識が高まり、明治十五年四月に伊勢に皇學館が設立され、九月に東京大学文学部に「古典講習科」が「国学専門の学科」⁽³³⁾として開業し、同年十一月に皇典講

究所が開齋式を挙げるなど、時勢に対して国民精神の覚醒をめざす施設がつくられ、国学が再び注目される気運を見せたい時期である。そのようななかで長谷川貞雄や賀茂水穂らは国学者賀茂真淵の墓の改修や国学四大人の贈位をめざす事業を展開していたのである。大村益次郎銅像建設の発起は、このような報国隊関係者が結集して国学者顕彰運動を展開したことと、維新をもたらした人々を顕彰する気運のなかで、報国隊関係者が大村益次郎の顕彰と隊の顕彰を併せ行おうとしたことが、主唱した背景として考えられる。

おわりに

大村益次郎銅像の円柱部は、大村を顕彰する三條実美の撰文并書を鑄出した、本来なら銅像の中心となるべき部分であるが、上に乗る銅像が意識されると銅像の台座のように見做されるようになった。大熊氏廣は制作過程の明治二十三年に既に「鑄鉄台」と称しており、この彫刻家の見方がその後定着したのかもしれない。また、円柱部はいつ誰が制作したのか不明であったが、本稿では、賀茂水穂の構想により、彼の推挙で東京本所の鑄物師中村惣左衛門が鑄造し、明治二十三年四月から六月頃に基壇の上に据えられたことを推測した。大村銅像は、初の本格的な西洋式銅像と評価されており、靖國神社外苑の馬場中央という公衆の多く集まる場所を選定したことも、西洋のミニユメントにふさわしい立地であった。銅像は、西洋の彫刻や銅鑄を本場で本格的に学んだ大熊氏廣の作として、この後に銅像時代をもたらすさきがけとみられている。しかし、基壇を築いた石工は「東京屈指の巨匠」、円柱部は本所の鑄物師と思われ、近代以前からの日本の伝統技術によって制作されている。西洋一辺倒でなかったことが注目される。

建設の流れから見ると、基壇が明治二十年八月に起工して翌二十一年七月に竣成、円柱部は大熊の渡欧中に構想や鑄造が進められ、明治二十三年四月から六月頃に据え付けられたと思われるが、同年七月の時点では銅像の高さや関

連する費用も定まつておらず、東京美術学校の岡倉寛三に相談していた。それが決定すると、翌八月から大熊は石膏の原形制作に着手し、翌二十四年六月から鑄造に着手して翌二十五年十月に完成、同年中に据え付けられて翌二十六年二月五日に落成式が挙行された。大熊氏廣に委嘱してから落成式まで約八年、基壇着工から銅像完成まで約五年かかった。大村像の建設は、設計を委嘱された大熊が基壇建設中に渡欧留学したことで、基壇の上に乗るものが定まらず、建設が遅れた。日本に本格的な西洋式銅像を生み出すにあつてのさまざまな模索や苦難を物語るものであつた。

大村益次郎を偲ぶ十三回目の年祭が明治十五年十一月十五日、大村の鳩居堂で学んだ野邊地尚義が支配人をつとめる紅葉館で催された。席上、長谷川貞雄と賀茂水穂が大村益次郎の銅像を靖國神社に建設することを発起し、百余名の参会者から賛同を得た。その頃明治維新に功績をあげた人々を贈位して顕彰する気運が高まつていたが、明治十五年における大村を顕彰する必然性は特に見当たらない。大村の年祭に会した人々は、十年祭の時点で大村の郷里山口県鑄銭司村の大村神社に「大村子神道之碑」を建立した。しかし大村が活躍した舞台は長州での四境戦争の後は主に京都や江戸・東京に移り、軍務官判事として上野戦争を鎮圧して江戸を戦火からまもるとともに、東北・箱館戦争を鎮圧して内戦を収め、新政府における軍制改革の基礎を創り上げた功績がある。東京に大村を顕彰する記念碑としての銅像を建てるといふ長谷川・賀茂の発起に、十三年目の年祭に会した人々が挙つて賛成したのは、大村が長州人であるとともに明治政府の軍務官判事・兵部大輔として維新盛業を成し遂げた功労者であることから、彼を顕彰する銅像を東京に建てるといふ発起に賛同したものと思われる。時期の問題というよりは顕彰の場所が東京であつたからではなからうか。また「大村子神道之碑」のような従来型の顕彰碑とは違った西洋のモニメントに倣つた銅像を建てるといふことは、その記念性が顕著であることとともに、洋式軍制を推進した大村にふさわしい顕彰の形として、洋行者が多い参会者の賛同を得たのではなからうか。一方、主唱者である長谷川貞雄や賀茂水穂については、発起当時、

折からの国学台頭の気運のなかで報国隊の元隊員を中核として賀茂真淵の墓地改修と真淵ら四大人の贈位に奔走していたことから、大村益次郎銅像建設の発起は、報国隊への想起と顕彰の念が背景として強くあつたものと思われる。本稿作成にあたり、賀茂百樹の孫賀茂千春氏、浜松市西区雄踏町の中村正直氏、嶋竹秋氏、同町金山神社関係者、浜松市博物館の宮崎貴浩氏、東京藝術大学大学美術館、川口市立文化財センター分館郷土資料館の島村邦男氏、小湊誕生寺、川島敏郎氏、屋外彫刻調査保存研究会の代表田中修二氏と大坪潤子氏には多大なご便宜やご教示を得た。また本稿は國學院大学研究開発推進センター第四回研究会で発表した内容を一部手直ししたものであり、研究会に参加された先生方から貴重なご意見をいただいた。付して篤く御礼を申し上げます。

註

- (1) 屋外彫刻調査保存研究会『屋外調査保存研究会会報』創刊号（一九九九年）、二十五頁。
- (2) 註(1)文獻では、大村益次郎銅像についての文獻や美術史、金属の化学分析や基壇下部の発掘調査も報告されているが、柱部については殆ど分析されていない。木下直之『世の途中から隠されていること―近代日本の記憶』（晶文社、二〇〇二年）、吉田朝子「大熊氏廣作《大村益次郎像》から「銅像」とは何かを考える」（『近代画説』第十四号、二〇〇五年）で、円柱部の意味づけが述べられている。
- (3) 註(1)文獻による。
- (4) 屋外彫刻調査保存研究会（代表…田中修二氏）からご提供いただいた黒川弘毅氏撮影の写真による。
- (5) 現物は浜松市博物館寄託の中村家文書（中村家文書目録「宇布見村・新所村、三四六・三四七番」）にある。
- (6) 木下直之『世の途中から隠されていること―近代日本の記憶』（晶文社、二〇〇二年）参照。

- (7) 東京藝術大学が一九八五年に入手したもので、賀茂水穂家旧蔵資料と思われる。同書簡を含め大村像建設に関わる文書七点が卷子装されている。書簡のみは、吉田千鶴子「大村益次郎銅像関係資料」(『昭和59年度東京藝術大学藝術資料館年報』)所収、一九八五年)、東京藝術大学百年史刊行委員会編『東京藝術大学百年史 東京美術学校篇 第一巻』一八一頁(一九八七年)で紹介されている。
- (8) 岡倉書簡の「之ノミヲ存して製作致度」は、円柱部が竹内久遠らが実見した時にもっと長大であったものを、三條実美の書の部分のみ残して切り取るように読み取れる。現在の円柱部は三條の書が目一杯鑄出されていることから、現在の円柱部からはこのような岡倉書簡の表現は出てこないだろうと思われるので、円柱部据え付け当初は現在よりもっと長大であった可能性があることを指摘しておく。
- (9) 明治美術研究学会事務局編『明治美術研究学会第十四回研究報告』(一九八六年)所収。
- (10) 公文雜纂、明治二十一年第六卷内務省一「休職内務八等技手大熊氏廣自費仏国留学ノ件」、国立公文書館所蔵。
- (11) 村田峰次郎「大村益次郎先生傳」(一九九二年)五十二頁。『国民新聞』明治二十四年六月二十日付「彫刻家大熊氏廣氏を訪ふ K・Y生」にも「氏は昨年八月工を起し拮据六ヶ月形成りて之を陸軍銅鑄場へ交付し」とある。
- (12) 浜松市西区雄踏町に鎮座の金山天神社。明治二年の二品兵部卿嘉彰親王染筆の神額には「金山彦神社」とある。
- (13) 拙稿「靖国神社と白金海軍墓地」(國學院大學研究開発推進センター編『招魂と慰霊の系譜——靖國』の思想を問う) 錦正社、二〇一三年)に詳述した。
- (14) 二〇一六年八月、雄踏町の郷土史研究者嶋竹秋氏のご案内で実見した。転墓の時期や賀茂家墓地については、古橋一男『雄踏町宇布見(中村) 金山天神社及加茂家・資料』(一九九七年)を参照した。
- (15) 片桐日泉『五十万人講乃いのち』(誕生寺、一九九二年)、寺尾英智『続小湊山史の散策 誕生寺』(誕生寺、二〇〇六年)参照。
- (16) 註(13)に同じ。
- (17) 賀茂水穂の日記で、水穂の子巖雄が大正十三年六月に賀茂百樹へ送ったもの(大正十三年六月十四日付賀茂百樹宛葉書)。賀茂百樹旧宅所蔵。
- (18) 有栖川宮歴世行實編修掛『有栖川宮総記』(高松宮家、一九四〇年)八十四頁によると、熾仁親王前妃及び父熾仁親王妃の墓があった。

- (19) 太政類典、第一編第一卷、制度・詔勅・臨御親裁・禁令・布令揭示。
- (20) 大村益次郎先生伝記刊行会『大村益次郎』(肇書房、一九四四年)、「山口市史」史料編(民俗・金石文)を参照。
- (21) 「明治十五年 賀茂真淵大人墓地改修ノ件及賜金贈位ニ関スル書類 賀茂水穂」の貼り紙がある網代籠に収められた宛先不明の書簡控えと『畧日記』。籠に収められた文書等は、賀茂水穂が収集した墓地改修や贈位に関する一括資料で、賀茂真淵家を継承した賀茂百樹に譲り渡したもの(未公刊)。文書の閲覧は賀茂千春氏にご便宜をいただき、文書の解読は「畧日記」を含めて伊勢原市文化財保護審議会委員川島敏郎氏にお世話になった。
- (22) 『東京名所圖會』麹町區之部(明治三十一年)、及び公文備考類、明治十九年公文雜輯卷二「靖國神社境内ニ故大村兵部大輔肖像建設之義」に載せる。
- (23) 註(5)に同じ。写真は所藏者中村正直氏のご諒解を得て浜松市博物館の提供による。
- (24) 『公文録』明治十年第十八卷、国立公文書館所藏。
- (25) 清水重敦「官社へ銅石像設立之儀ニ付伺」考(『近代画説』第二十二号、二〇一三年)。
- (26) 浜松市博物館寄託の中村家文書。葉書の所在は同博物館の宮崎貴浩氏のご教示による。
- (27) 註(25)に同じ。
- (28) 大村益次郎先生伝記刊行会『大村益次郎』(肇書房、一九四四年)所収「弟子籍(鳩居堂塾)」。
- (29) 註(13)に同じ。
- (30) 主唱者名は『明治日報』明治十五年十一月二日付「賀茂真淵大人之墓地經營并紀念碑建設廣告」による。
- (31) 註(21)の墓地改修関係一括資料に上請文の下書きや浄書控えなどがある。
- (32) 公文録、明治十六年、第二十一卷、明治十六年二月、内務省第一「故羽倉東滿外三名贈位請願ノ件」。
- (33) 小中村清矩「古典講習科開業演説集」(『陽春廬雜考』卷八、明治三十年)。